はじめに

◆本資料集は、文部省科学研究費「重点領域」による平成６年度、同７年度の「地域発展の固有論理」（主査　原洋之介東京大学教授）と、同時期の国際学術調査「地域発展の固有論理」（主査　末廣昭）の研究成果の一部である。この研究計画において私は、（１）東南アジア地域における経済発展の固有の論理の比較検討、（２）タイにおける地方経済の展開過程と「地方成長経済圏」の可能性の実態調査、（３）タイにおける技術形成の歴史的展開過程の実証分析、（４）タイにおける労使関係の変容の実態分析、という４つのテーマを設定した。

このうち、（２）の課題については、その研究成果の一部を、「タイにおける拡大首都圏と地方経済圏」と題して、『総合的地域研究』第９号（１９９５年）に公表した。なお、タイの労使関係についても、基本年表の作成と企業聞き取り調査の整理を現在、実施中である。

◆本資料集は、上記の目的のうち「**タイにおける技術形成の歴史的展開**」の問題を、戦前期タイ鉄道建設と鉄道運営に限定して扱ったものである。この問題については６年前から研究を開始し、タイをはじめイギリス、ドイツ、日本でそれぞれ一次資料、統計データの収集や聞き取り調査を重ねてきた。この過程で、大阪外国語大学の吉川利治教授からは、『タイ鉄道業５０年史』などタイ鉄道、国鉄に関する多数の資料を送付して頂いた。また、ロンドンの大英図書館、外交史料館、インド文書館、そしてバンコクの国立古文書館が所蔵する史料については、ロンドン大学オリエントアフリカ学院博士課程の南原真氏、ミュンヘン博物館手書き文書史料館のヴァイラー文書については、ベルリン自由大学図書室のスガ氏とミュンヘン大学のホルガー助教授、「葬式本」の補充については、京都大学東南アジア研究センターの玉田芳史助教授、東京大学社会科学研究所が所蔵するタイ語、英語新聞（週刊バンコクタイムズ紙、サヤームニコン紙ほか）やアメリカ領事館報告、イギリス外交文書のマイクロフィルムの焼き付けと整理については、東京外国語大学博士課程の柿崎一郎氏から、それぞれ多大の協力を得ることができた。ここに記して謝意を表したい。

◆本資料集は、私がかねてから構想している『タイ資本蓄積論　３部作』の一部をなす。第１部は、１９８９年に英語で刊行した本（*Capital Accumulation in Thailand 1855-1985*, Tokyo: UNESCO The Centre for East Asian Cultural Studies ）で、主としてタイにおける資本家の生成と発展を扱った。　第２部は「タイにおける技術と技術者・熟練労働者の形成」、第３部は「タイにおける賃労働者の形成と労働運動の展開」をそれぞれ扱う予定である。本資料集は、第２部の本を執筆するための準備作業をなしている。

◆１９８９年に第１部を刊行したあと、私は第２部の研究を進めるため、鉄道局、陸軍兵器工廠、海軍内燃機関局、同造船修理工場、郵便電信局、灌漑局などの史料を探し始めた。しかし、記念本や通史を除くと、個々のタイ人技術者の形成に関する手掛かりはほとんどなく、私の研究は一時的に頓挫してしまった。ちょうどその頃、１９９０年４月から１年間、京都大学東南アジア研究センターの客員研究員を兼任することになり、同センターが所蔵するチャラット文庫（８０００冊所蔵、うち４０００冊が葬式本）を自由に閲覧しコピーできる機会を与えられた。そして地下の移動式書架に納められている本のうち、たまたま最初に手にしたのが、本書の解説で紹介する鉄道奨学生第１期生、ルワン・シリアッカニーガーン（本名スート・パーラシリ）の葬式本だった（本書の第Ⅲ部の鉄道関連基本統計集　表Ⅶ-１２の経歴を参照）。

この葬式本を通じて、私はタイ鉄道局が１９１８年から多数の若いタイ人を欧米に官費留学生として派遣し、土木工学、機械工学、電気工学、商学会計学を学ばせていることを知った。また、この鉄道奨学生は選抜試験組、推薦組をあわせて７４名にのぼり、さらに彼らが鉄道建設・運営や鉄道工場のタイ人化政策の要となると同時に、工業省工場局、同鉱山局、内務省都市土木局（道路局）、中央銀行などの発展においても、きわめて重要な役割を果たしていることを、のちに知るようになった。そこで私は、タイにおける技術形成と技術者形成の研究対象を「鉄道業」に絞り、とりわけ鉄道奨学生の各人の経歴を可能な限り追跡し、そして追体験することで、この問題に接近したいと考えるに至ったのである。

いまから考えると、８０００冊を越えるチャラット文庫所蔵本のなかで、偶々手にした本が鉄道奨学生、それもきわめて魅力ある人物であったことは、単なる偶然というよりは、天の恵みであったように思えて仕方がない。京都から堺市の自宅までの帰路の電車のなかで、むさぼるようにコピーを読み、自宅に帰ってからも読み続けて、明け方にその興奮をチャラット文庫を集められた石井米雄先生のもとに手紙で伝えたことを、いまでもよく覚えている。

その意味では、この研究は京都大学東南アジア研究センターのチャラット文庫との出会いから始まったのであり、その機会を作ってくださった石井米雄教授（当時、東南アジア研究センター所長）、故土屋健治教授の両先生、そして北野さんをはじめ同センターの図書資料部の人々のご協力、ご好意に改めて深く感謝したい。

末廣　昭

１９９６年２月２０日